柏崎体育

発行所　柏崎体育団　柏崎市役所
発行編集人　月橋　奈
印刷所　柏崎印刷株式会社
定価　一部　15円
（毎月1回　10日発行）

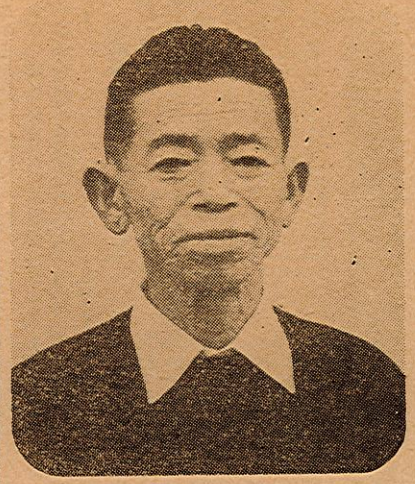
坂田体育研究所 特集

坂田四郎吉氏の悲願実る

坂田体育研究所体育館完成

竣工式は五月四日

◇坂田四郎吉氏の終生の念願であった体育館が、財団法人坂田体育研究所として堅実な歩みを進みはじめた矢先、植木豊太氏らの友情と篤志で急速に実を結び、集会室、便所をもつ七十坪の体育館として北園町の一角に誕生した。



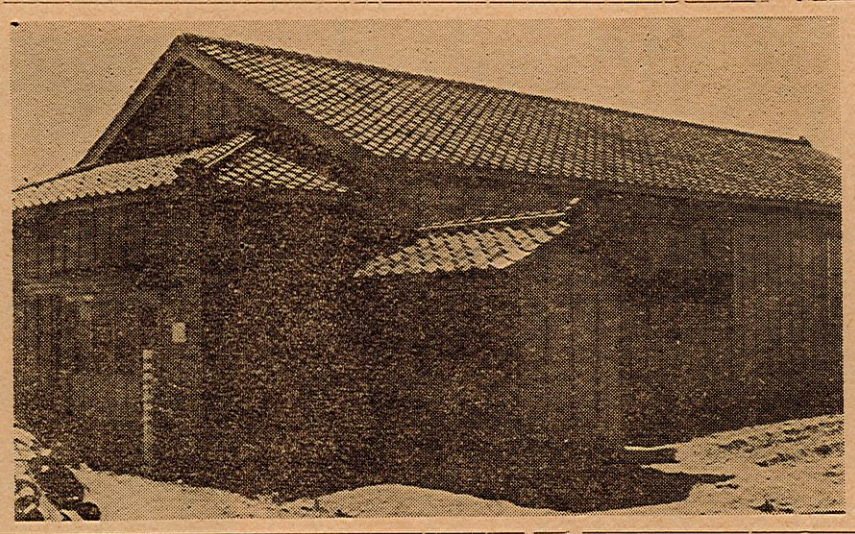
坂田四郎吉氏近影

かねてから社会体育専用体育館の設立を提唱していた坂田四郎吉氏に共鳴する人達によって、いろいろ形をかえ乍らも進められてきた体育館建設運動は、昭和二十九年一月の柏崎体操倶楽部青年部発案の坂田記念体育館建設運動で具体的な募金活動の第一歩を印したのであるが、N響メンバー管絃楽演奏会の募金興行に失敗して一頓坐していたところ、昭和三十三年五月何とかしてやりたいと立ち上った人達によって坂田四郎吉先生後援会と形態を変えて第二のスタートをしたのである。

昭和三十四年には財団法人坂田体育研究所を設立することにしてその実際活動に移ったのであるが、体育研究所設立という方向にきまった昭和三十五年十一月植木組社長植木豊太氏の体育館用材寄贈と、東京山田商店社長山田正雄氏の土地提供で急速に話がまとまり、資金も整わぬままに体育館建築に着手することになり、植木組社長の御厚志に甘えて、直ちに工事にかゝり、三月三十一日見事竣工したものである。

完成した研究所は九米×二一・六米（六〇坪）の縁甲板張りの体育場と四・五坪の控室、三坪の玄関、二坪の便所で、体育場は四〇W螢光灯六本の照明がある。

この竣工式は来る五月四日午後一時から同所において多数の来賓の出席を得て行われることになった。



感謝に明け暮れ

坂田四郎吉

長いあいだ憧れて居りました体育研究所が、そしてその体育館が、今現実となって、私の此の目の前に厳然と浮び上って居ります。

歓びで、寝ても眠れぬ。之れが昨今の私の心境であります。

此の無能凡愚の私に、再びあの、グラウンド建設の時のような、寧ろそれにも勝る歓びの月日が恵まれようとは、これが果して現実かと、恰も夢のような心地で、毎日感謝に明け暮れて居ります。

「体育の都建設」などと云う、柄にもない空想を、この貧弱な胸に抱いて茲に五十年、ただ、遮二無二やって来ただけの私を、神がいや皆様が、可憐に思召めされての賜物に外ならないのであります。

此の皆様の温かい愛情には御礼の言葉もありません。

かかる有難い恩義に酬えます道は、ひたすら研究所の経営に至誠を尽し、その機能を高揚して、もって体育文化の向上進展に貢献致します他はないのであります。

然るところ、元より浅学無能の私であり、況んや七十五才と云う老境に達しましては、徒らに希望のみ多くして、その成すところは知るべきのみ、誠にお恥かしい至りでありますが、幸に、体育研究家の皆様、並びに学識経験者各位の御協力を戴きまして、皆様の御期待にお添い出来る研究所と致したいものと、新たなる抱負に胸を轟かせて居ります。

何卒、皆様の絶大なる御指導と御援助を心からお願い申し上げる次第であります。

坂田体育研究所へのよろこび

日本体操協会々長
三橋体育研究所長　三橋喜久雄

坂田体育研究所の発足、研究所活動の開始を双手を挙げ、声高く御慶び致します。

坂田四郎吉先生が体育館を建設なさって、研究所としての御活動に踏み出されるということは予て承っていましたが、いよ／＼体育館も竣工して、この四月から研究活動を始められますこと、近くは柏崎市、新潟県、離れては東京、日本国何れの所までも、遠くは世界的に、何という意義多いことでしょう。規模としての大小よりも、坂田先生の如き生きた人間それ自体が研究の主体であり、そしてまた、先生それ自身が研究の資料であり、しかも、その研究成果を身と精とをもって発表し、指導される、研究所としての質的に持たねばならぬものを、しかっと揃え具有して居られると私は思い知っています。坂田体育研究所が出来たことは極めて意義深いものがあると言うのは、これが故です。

一八一四年の五月十八日に「リング」がストックホルムのハムン町に造った中央体操研究所も規模的には極めて貧弱なものであったそうです。ヤーンが一八一一年にベルリンのグルンネワルドに造った青年体練所も、まことに、ささやかな形態の存在であったようです。しかし、リングの体操原理に基く、その本質的体操構造は今も新しいものとして日々に生きています。ヤーンの流し始めた青少年練磨という水は現代に於て益々底の深い幅の広い溝となって世界中を流れうるおしています。

坂田四郎吉先生、先生は所謂年令的には若くはありますまい、従って過去にも讃うべきもの、偉大なるものの数々あったことを私は知っています。しかし、また先生は、今年から新しく生まれて出て一歩二歩と研究所活動の道を開き進んで行かれる少年であり、青年の大小よりも、坂田先生の如き生きた人間それ自体が研究の主体であり、そしてまた、先生それ自身が研究の資料であり、しかも、その研究成果を身と精とをもって発表し、指導される、研究所としての質的に持たねばならぬものを、しかっと揃え具有して居られると私は思い知っています。坂田体育研究所が出来たことは極めて意義深いものがあると言うのは、これが故です。

一八一四年の五月十八日に「リング」がストックホルムのハムン町に造った中央体操研究所も規模的には極めて貧弱なものであったそうです。ヤーンが一八一一年にベルリンのグルンネワルドに造った青年体練所も、まことに、ささやかな形態の存在であったようです。しかし、リングの体操原理に基く、その本質的体操構造は今も新しいものとして日々に生きています。ヤーンの流し始めた青少年練磨という水は現代に於て益々底の深い幅の広い溝となって世界中を流れうるおしています。

坂田四郎吉先生、先生は所謂年令的には若くはありますまい、従って過去にも讃うべきもの、偉大なるものの数々あったことを私は知っています。しかし、また先生は、今年から新しく生まれて出て一歩二歩と研究所活動の道を開き進んで行かれる少年であり、青年の大小よりも、坂田先生の如き生きた人間それ自体が研究の主体であり、そしてまた、先生それ自身が研究の資料であり、しかも、その研究成果を身と精とをもって発表し、指導される、研究所としての質的に持たねばならぬものを、しかっと揃え具有して居られると私は思い知っています。坂田体育研究所が出来たことは極めて意義深いものがあると言うのは、これが故です。

一八一四年の五月十八日に「リング」がストックホルムのハムン町に造った中央体操研究所も規模的には極めて貧弱なものであったそうです。ヤーンが一八一一年にベルリンのグルンネワルドに造った青年体練所も、まことに、ささやかな形態の存在であったようです。しかし、リングの体操原理に基く、その本質的体操構造は今も新しいものとして日々に生きています。ヤーンの流し始めた青少年練磨という水は現代に於て益々底の深い幅の広い溝となって世界中を流れうるおしています。

坂田四郎吉先生、先生は所謂年令的には若くはありますまい、従って過去にも讃うべきもの、偉大なるものの数々あったことを私は知っています。しかし、また先生は、今年から新しく生まれて出て一歩二歩と研究所活動の道を開き進んで行かれる少年であり、青年

これからです!!

問題は……

柏崎体育団長　近藤祿郎

努力、この言葉は坂田先生に作られたと思われる程先生には全く頭が下がります。

公認グランドの設立、社会体育の振興、体育民踊の普及……等。

今又一生の念願であった体育研究所の発足。

柏崎体育が県下は申すに及ばず、日本的な存在となったのも、その土台には先生の力がどれ程尽されておったか……。私共は今後の体育の在り方を更に研究し、系統だつ、科学的な分析により、より良い方向に進まなければなりません。

之がためにも、こゝに坂田体育研究所の発足に対しては心から快哉を叫ばずにはおれません。

坂田先生が此処まで進まれる過去に於ては、幾多の困難、反撃があったでありましょう。

しかし一面、先生は幸福な人でもあります。植木組社長を始め心からの親友、親戚、支援者を持っておられた。これがこのたび実を結んだのです。

私共後継者は、この実を熟すように之から努力しなければなりません。

坂田体育研究所は将来どうしてもて[illegible]体育研究所に発展せしめなければならないと思います。

全国でも珍らしい財団法人の体育研究所の設立は、如何に柏崎市がスポーツ都市であるかと、目を見はらせております。

国民体育大会も間近であり、市全体のチームワークによりスポーツ産業として大発展を目指すためにも当研究所の充実を皆様に御願い致す次第で御座います。

坂田体育研究所実現の功労者

植木豊太殿（植木組社長）

植木さんは坂田先生とはいわゆる竹馬の友で、特に肝胆相照す極めて親密の間柄であります。

殊に坂田先生が社会体育の振興に生涯を捧げて居る姿に感動され、更に坂田先生が長年体育館を切望して居るのに、遂に今日まで実現し得ない事に深い同情を寄せられて居りました。丁度、昨年来坂田四郎吉先生後援会によって財団法人坂田体育研究所建設の計画が進められるに至った事を、殊のほかお喜びになり、たまたま白根市に於て買収された紡績工場の一棟（事務室及び便所付）を体育館用材に寄贈して下さったのであります。そして植木さん自らの監督の下、急速に工事が進められ、財団法人認可と相俟って茲に予期以上の立派な体育館が実現したのであります。

誠に植木さんの御人格とその篤い友愛の精神には関係一同が感激し、且つ敬服申し上げて居る次第であります。

山田正雄殿（山田商店社長）

山田さんは、坂田先生長女節子さんの嫁ぎ先、山田文雄さんの御令兄でありますが、以前から坂田先生の奉仕生活に共鳴されて居り従って、乞わるる儘に喜んでその所有地を体育研究所の敷地に無償提供して戴いたのであります。

体育館が、このように急速に事を運べましたのは、勿論植木さんの御厚志による処でありますと同時に、此の敷地がなかったならば建築も進められなかった訳でありまして、誠に山田さんの高い義侠の御志に対しましてこれまた関係者一同が心から感謝申し上げて居る次第であります。

体育館建設発願から体育研究所設立まで

坂田四郎吉

私が社会体育専用体育館の建設要望を、新聞紙上に訴え出したのは、昭和五年の事でありますが、これより先、グラウンド問題が解決致しました大正十二年四月からは決然と社会体育の指導に乗り出し、市民早起体操会、納涼体操会、或いは民踊の夕べ等々社会体育事業を次から次へと起すに及んで、体育館の必要を早くより痛感して居ったのであります。

殊に昭和六年一月、柏崎体操倶楽部の創立により一層その必要に迫られましたので、一再ならず新聞紙上にてこれを訴えると共に、その実現運動を起すこと又屢々でありましたが、事遂に成らなかったのであります。

私は昭和九年四月に、長岡市に転任を命ぜられ、四年間柏崎を退去、同十三年に教職を辞して帰柏致しましたが、時恰も時局急迫、私は自衛部の指導やら、理研を始め数十工場の能率増進、戦力増強のために体育指導に奔走し、此の間体育館問題を顧る暇がなかったのであります。

昭和二十年の終戦後には逸早く立上り、先ず体操倶楽部を強化し、指導者の養成と体操の指導に努め、更に、体育レクリエーションの普及奨励に当り、その協会を設立し、或いは体育民踊の指導に一層の努力を払う等、社会体育への奉仕に精進するに及んで、体育館の必要切なるものがあり、或いは体操倶楽部の諸君と共に、或いは体育主事島掛藤次郎氏を中心とする等、幾度か実現運動を起しましたが、何れも成功することが出来なかったのであります。

昭和二十九年一月、柏崎体操倶楽部青年部が中心となり、期成同盟会が出来て「坂田記念体育会館」の建設運動が活潑に展開され、今度こそは実現するものと期待されたのでありましたが、これ又幾多の支障により、遷延今日に至ったのであります。

昭和三十二年十二月十一日は私の満七十才、即ち古稀に達しましたので、これを記念し、堀立て小屋でもよいからと、小道場を建てる計画を企てたのであります。これを見兼ねた友人各位により、近藤祿郎様を会長とする坂田後援会を結成して下さいました。

而して昭和三十四年九月二十七日の坂田後援会の集会にて「財団法人坂田体育研究所」を設立する事に相成ったのであります。茲に於て今井哲夫様の並々ならぬ御努力により財団法人の手続きが進められ、お蔭により三十六年一月十三日附にて登記認可、二月四日附にて登記済みとなり、茲に「財団法人坂田体育研究所」の誕生となりました。

これに先立ち、三十五年十一月、植木豊太様から体育館にふさわしい移転物の寄贈を忝うし、東京の山田商店社長様からは、その所有地使用の快諾を賜わり、更に植木組の御厚意にて急速に体育館建設が着手され三十六年三月三十一日に芽出度く竣工したのであります。

茲に四十年来の夢を実現して戴き、全く感謝措く所を知らぬ次第であります。

坂田先生に見る体育人の本質

月橋会

『男ありき』

柏崎市の体育行政は、市長事務部局に属し、教育委員会の事務部局に属していない。この様な市が全国にいくつあるか知らないが、珍しい存在である事はたしかだ、―（もっとも京都市の様に、観光局スポーツ課に属する様な変り種もあるにはあるが）―一体どんな事からこうなったのであろうか。

体育を教育委員会に所管させてはだめであると言い切ったのは、洲崎義郎市長である。その意見には我々も大賛成であった。それは体育の本質論から、体育は教育の手段としてのみあるものでない。体育を教育の手段としてのみ考える事は必ず体育の衰退を来し、国民を向上させるものでないという考え方である。又文部省の示す教育の方針中、体育に関する限り、誠に情ない程頼りない有様で、これを歴史的に見る場合、重大な注意をせねばならないと思わざるを得ない有様であった。将来は兎も角として、当時の情勢に於て、体育を教育委員会の所管にすることは、柏崎の体育を根なし草にする怖なきにしもあらずという不安からも、他市が如何なる態度をとろうともわが柏崎市は、独自の立場に於て体育行政を推進しようとしたのである。筆者の見る限り、この国の体育方針に関する不安は不幸にして的中してしまった。一見体育が非常に盛大かの如く見える現代に於て誰が体育による効果と、その利益を実証出来るであろうか。

平均寿命の延長でも、疾病の変化、身長の増加何一つ見ても、それが体育のためと言い得られるであろうか、否体育があずかって力あったとさえ言い得られない有様ではないか。反ってオリンピックの不振、不良体骼のはんらん、ゆがんだ身体、これは悉く体育の誤れる故と断じたくなる様なこの事は何を指すのであろうか。

我々が不遜にも「柏崎体育」ととなえるものは、何も見たこと、聞いたこともない体育ではない。それは私達の内心からしぼり出した体育でなければならないとするだけである。そうだこの柏崎体育という語句の持つ意味が重要なのである。

柏崎体育は一つの伝統を持っている。そして一つの実績を持っている。弁説や文筆によって説を建てているのではない。そしてそれは今日に於て顧みて、先駆者としての誉を持ち得るものである。この事は将来に亘っても銘記すべきである。

柏崎体育の確立に寄与された人々は数多くあり、ずっと遡れば牧口前荒浜村長あたりまでになるが、現在の我々が知る範囲に於てこれを求めるなら、洲崎義郎先生（刈羽郡体育協会長、柏崎体育団長、市長）坂田四郎吉先生、島掛藤次郎先生（柏中教諭、現新大教授）の三人に指を屈せねばならないと思う。筆者は洲崎先生の団長時代は副団長とし、市長時代の大部分は総務課長として仕え、坂田先生とは四年間同僚であり、今日でも色々お世話になっている。島掛先生は恩師であり、僅かの期間同僚でもあった間柄である。この方々の考え方や行績を筆者の知る範囲に書き述べても柏崎体育の意味づけにはなると思うが、坂田体育研究所の設立を機とし、坂田先生の姿を追い乍ら、いささか柏崎体育の真姿を求めて見たいと思う。

柏崎体育とは、柏崎という個を追求しつつ、体育という全でなければならず、体育という全を考えつつ、あくまでも柏崎という個に徹するものでなければならない。この後文にも文部省の示す体育を大いに批判するかも知れないが、筆者は徒らに文部省の悪口をいうのではない。文部省の名に於て、全くアヤフヤなものが押しつけられ、其れを何とも思わずフラ〳〵とやっている所に問題があるというのである。柏崎の体育が具体的に文部省を批判したのは戦前、戦中、戦後に亘るが、それ〴〵具体的文献もあり、今にして其の批判はいずれが正しかったか歴史の証明する所である。私的に亘って恐縮であるが、特に戦後の文部省の体育方針を痛烈に批判した「体育教授形態論」は筆者が書き、柏崎体育の指針としたが、今の文部省の指導方針と比較して見た時いずれが正でいずれが誤か、誰もが明白に知り得るであろう。

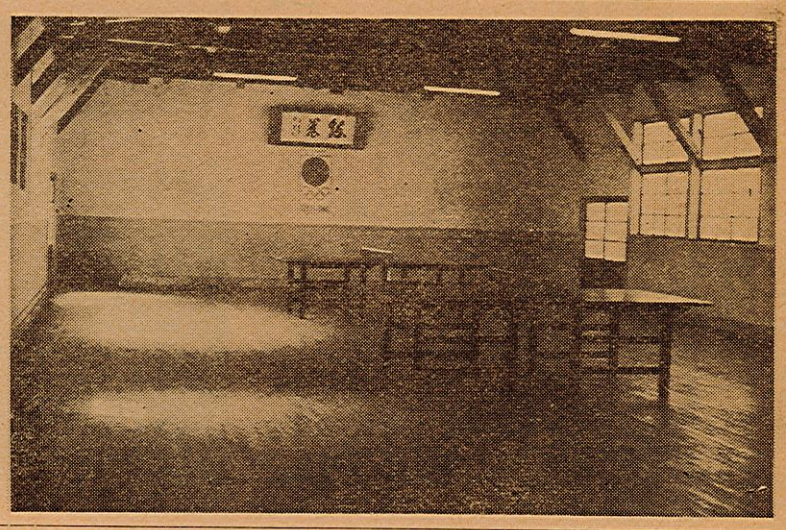
坂田先生の七十有余年の人生は悉く坂田式であり、又、坂田先生ならではの所である。しかし其れは体育という立場から見た時、誠に本道を行き、本質を追い、いささかも乱れを見せない。時に狂人扱いにされ時に政治ボスに追われ、時に超人扱いされ、薄給に甘んじ、ろう屋に住み、尚体育即生活に徹したのは坂田先生の現実である。しかし脈々たる本質追求の念は、神宮競技場に先がけること二年、北陸最初の公認陸上競技場をつくり、学校の先生ながら社会体育に挺身し更に体操クラブをつくり、今又体育研究所を設立する、正に坂田式であり、体育の真髄である。こゝに柏崎体育の姿を見ると共に、それは坂田体育であり、坂田式である。坂田先生に何か書を求めると「体育即生活」と揮毫されるが、筆者はその裏に「生活即体育」の字が隠れていると思う。坂田先生の体育とはそういう体育である。正に『男ありき』の感を深くする。

『自己完成』

「…体育もまたかゝる面に於てこそ考え得られるものであり、教育の伝統や、教育の慣習から生れるものではない。現実に生を営む全民衆の心の中の要求として生れるのである。即ち体育は近代精神の要求として近代精神が生み出した生活要件の周到なる合理的構成の一つの現れとして考えるべきである。従って体育の目的は生活の理性化である。生活を理性の光にあてて構成するのが体育である。」これは昭和二十二年当時労働科学研究所長であった暉峻義等先生が北鯖石中学に於てされた講演の一節である。当時の学校体育を痛烈に批判された感銘深い言であり、今尚耳底に残って忘れ得ないものである。実に体育はそうであり、自己の完成でなければならぬと思うのである。

坂田先生は教員としては学歴の関係もあり、決して形式的に重要なポストにはつかれていない。しかし数人のお子様を社会的にも立派に教育し、それぞれ社会重要な役に立てておられる。私の様に先生の給料まで知っている者には、誠に先生の努力に敬服すると共に、其の陰にあって黙々として先生に思う通りさせた奥様に無限の敬愛の念を捧げずにおられない。しかも先生の体育は「奉仕の体育」と自称する程の体育であり、今日に至るまで、出費こそすれ、収入になる所はいささかもない体育指導である。先生の体育は、アマ・プロ体育とは次元の違った体育であり、驚くべき体育実践である。若し自己完成という言葉があるならそのまゝ先生のために当てはめてよいと思う。おそらく先生は全面的に否定されると思うが、我々の周囲に体育を通して自己完成の言葉を与えられる者に誰があるだろう。

体育館で民踊の研究をする坂田氏



体育館内部

『物を創る』

或る席で外国には社会体育という言葉がないので、英語に訳す場合「スポーツ・アンド・レクリエーション」と書くといった講師がある。語学に暗い私は外国の事情は知らないが、社会体育という言葉が外国にないのが体育の本質なのか、社会体育などという日本独自の言葉をつくった日本の体育が本質的なのか、どっちがどうなのかと面白く聞いた。もっと突きつめてこの講師に、スポーツとレクリエーション、体育とレクリエーションの区別をどう考えるかということも聞いて見たかった。筆者の様に社会体育という体育はないと言う考え方の者にとっては中々興味深い所であった。

大体、終戦後、レクリエーションという言葉を大々的に使い、体育はレクリエーションであるなどと馬鹿な事を言ったため、学校の体育まで、面白おかしく、興味本位にやる事が体育であるかの如き錯覚に堕ってしまった。ましてや社会体育などという領域はこれに輪をかけて、娯楽即体育とまで言いたい様な気運さえ出た事は否定出来ない事実である。今更体育の歴史を説くまでもないが、体育は民族及び人間の確立の道として興っている。即ちそれはインド、中国に示される体操から、グーツムーツ、ヤーン、リングに示される体操まで、又見方によっては、近代アメリカ独自のスポーツ形成まで、それは民族の興隆を希い、民族の独立、強力のためのものであった。一人日本の終戦後の体育は、いささかも毅然とした所がなく、世俗に堕し思想も信念もなく、民族の脱力に拍車をかけたものである。その責任は誰なのか文部省であり、体育為政者でないのか。

体育とは、復元することでなく、創造する事である。レクリエーションそのものは、やり方により、とり方により種々様々になるが、其のニューアンスはやはりリクリエーションに発する復元的色素の多い事は否定出来まい。それは反動としての緊張感を忘れたいために方便として用いられたとしても、体力を育てあげ、体骼をつくり、偏癖を正常に戻し、行動力をつける事に如何程合理的に構成されたかと問われるなら、全く返す言葉もないと思う。体育は新しく創り出す事なのである。スポーツの二つ三つすこしやると体操の教員としての単位をくれ、教案さえ書けない様な体操教師を続々と送り出していささかも恥じなかった大学―今尚大した変りばえもないが―は誰が指導しているのか。従って鍛えられるべき小学校時代は、全く遊びに過し、無為無能、中学に入るとクラブ活動だと称して、モーターをつくることも、体育も、書を書くことも皆同じ平面のものとして行われている。しかも其のクラブ活動の体育とは選手主義体育であり、見方によっては戦前の課外運動を遙かに悪化したものであると思う。この様な事が本当の体育なのであろうか。こゝに体育とは何ぞやという疑問がわかないのであろうか。この様な体育によって育てられる小中学校の教育に何の不思議も惑じられないのであろうか。

体育は対象を見つめる事による疑問や悩みから発する創造である。坂田先生が大正年間から、全く未知、未開拓の一般人の体育に手を入れ、朝起体操会を創設（ラジオ体操以前から）して神社の境内を大いに利用したり、納涼体操として夏の夜のレクリエーションを実施したりされた事、そしてこのいずれにも、体育民踊と称して、民踊を体育的に検討したものを入れ、大いに其の盛り上りを計られたことなど、省みて誠になつかしく思い出されると共に、誰の真似でもない、先生が先生の体育観と哲学から行動された偉大さを見るのである。更に昭和六年には、当時の日本にも珍しい存在とされた「柏崎体操倶楽部」という、全く一般人のそれも多忙を極めている実業人を主とするクラブをつくり、一週何日かの朝の体操を実施して今日に及んでいる偉業、いずれも、時流に溺れたり、一時の気まぐれでなく、やむにやまれぬ立場から発したものであるこゝに本当の体育があると思うのである。又筆者の知る限りに於ても、学校の体操に深い疑問をいだき、真に生命的な体操は何であるか、真に体育的な体操は何であるかに悩まされておった様である。デンマーク体操を玉川学園で本格的に指導はじめてからは、その第一回の講習生として参加された事も記憶している。もう遠い昭和七年のことである。

自己の現前にある体育に全身を以てぶつかり、あくまでもたゝかい、其の中に反省と疑問を見出し、更にそれを追求するというのが先生の一生であった。従ってそこには摩擦もあり、苦悩もあった。しかし先生の一生は誠実を以て立向い、熱情を以て是に処して来たため、そこに人の気のつかないもの、気付いてもやり得ないものが自ら創造されたのである。

「スポーツの都柏崎の建設」という旗をかゝげ、度々新聞などに主張をのべ、「大グラウンド建設の提唱」などと、誰もが考え及ばなかった事を、大正年間に言い出したのである。白面のやせた青年坂田のこの言は、誰も意に介しない様に見え、気違い扱いでさえあった。しかしこの結果出来上った陸上競技場は、今日に於ては規模構造は古くなったとは言い、柏崎のシムボルであり、体育都市柏崎とは市民の誇りを以て言う合言葉になっているではないか。げに体育は創造であり、それは努力と精進の賜である。柏崎の体育が更に飛躍しなければならない時、本当に体育をおもい、体育に情熱をもやす人を求めずにおられない。

『若さ』

ある口の悪い文房具屋のオヤジが、余り熱心に体操をすゝめられるので、遂にことわり切れず、「坂田先生、体操してもいゝが、先生みたいに背が低くなると困るがナ――」といった実話がある。それ程の小男である。おまけに内臓が普通人と右左反対についているという医学的に珍しい存在でもある。これ又先生にシボられたある男が、「先生の心臓は我々と反対の方についているので、我々のが、ドウキが速くなる時には、先生のは遅くなるのだろう、そうでなくては、あゝ続くわけがない」といった事がある。それ程先生の活動はエネルギッシュである。婦人体育の指導などには、ボロ自転車で文字通り刈羽郡、柏崎市を東奔西走していられる。七十四才の今日頭髪は依然として真黒であり、写真などで見ると年令の推定が出来ない。体の柔軟のこと、よく動くこと、老人という言葉は全く当らない。体育指導委員を選定する時や、県の体育振興委員を選定する時、文部省から、こんな老人をしてどうなるかという様な注意を県が受けたそうである。しかし実際の坂田先生の肉体的年令は三十代、四十代といっても通用する。それだけの若さがある。

古典に「勇徳者健也」とあるとか、即ち、たえず進み求め、心を張り、たゆまないものは、心身共に健康であるとでも言ったらよいのであろうか。体育人はこの心構えが大切であり、又この通りでなければならないと思う。体育の確立を念じ、体育の指導に専念する先生には、前があって、道

あの頃と共に

石黒武夫

忘れもしない昭和十四年五月十八日。

それは柏崎体操クラブが「社会体育館建設資金獲得運動」のため柏盛座で映画「爆音」大会を開催し、ステージから入場者に向って社会体育館建設の必要性を呼びかけた日であります。「学校に専属の体育館があるが如く、市民大衆にも専属の社会体育館がなければならない」これは当時日本の片田舎にあっては正に一片の夢でしかなかった。

しかしこの夢は坂田先生を中心に体操クラブ員が今日まで語り続けた夢ではありましたが、これはつかみどころのない夢でないことは、近代社会体育発展の基本的具体化の手段として欠くことのできぬものであることが時流と共に実証されつつあることを見れば何人も、肯首せざるを得ないものである。その意味では今日坂田体育研究所が実現したことは、社会体育発展の必然性と云ってもよいかもしれないが、私達クラブ員として夢が現実となったとして理屈ぬきにして嬉しいのである。

過去数十年に亘り柏崎体育界の中心的背峰をなした坂田先生による社会体育の影響は計りしれぬものがあるが、学校体育館を利用していた今までとちがい、これからは、地の不便は多少あるかもしれぬが、思うがまゝに、我が所信を貫ける専属の体育館をもったことは何れの面から見ても社会体育普及の立場から、喜ばしいことであると共に有力なるモデルケースとなるにちがいない。

三面下段へ

オリムピックと

柏崎体育と坂田先生

今井哲夫

東京オリムピック大会を四年後にひかえ、今我が国の朝野は施設、環境及び選手強化について甲論乙駁をしておりますが、就中選手強化策について、ローマオリムピックの不成績に焦り入賞可能な一部特定の選手の養成に集中しようとする動向があります。

この動向は一部選手の専業化、プロ化に通じ、国民の総体的レベルの向上をないがしろにする危険を包蔵するものであります。

近代オリムピックが高度化した競技の争いの場となり、競技に勝利を得ようとする国と選手が一途に専業化に趨り、プロ化の傾向にあって、アマチュアリズムは危殆に頻し、オリムピックは曾って古代オリムピックが崩壊した経過をたどって、今や危機に当面しているというも過言ではありません。

我々は「スポーツが職業化して発展するときは、青少年の野望は刺戟され、必ずや彼等の競技労働は高く評価売却せんとして、彼等の才能を資本化し、凡ゆる犠牲を払ってもある種のスポーツに熟練せんと寸刻を争って熱中するに至ろう。この報酬の可能性は彼等をして学業その他の必要な努力を怠らしめ、将来に課せられた使命を誤らしめ、価値に対して誤まれる見解を抱かせることになる」とするアマチュアリズム擁護の立場に立って東京オリムピックを支持し、国民の体力技能の総体的レベルの向上の中から代表選手を選び活躍せしむべきことに思いを新たにしたいと思います。

柏崎の体育はこの思想に一貫して、市民全体の健康生活の確立助長こそが真の体育施策であり、その施策は強力な実践によってのみ推進し得るものであると信じ、かつ実践してまいりました。

柏崎の体育が、市民体育の向上を目指し、困難な諸情勢の中にあっても真実の体育の道を守って参りましたのは、実は坂田四郎吉先生の偉大な指導によったものであります。

坂田先生は、少年時代自らの病弱を厳しい練養により克服し、一介の若手教員の身で健全な青少年育成の道場として大運動場の建設を提唱して、挺身全国に魁けて現在の柏崎市営陸上競技場をつくり、柏崎体操倶楽部の創設、民踊の体育的活用の指導等業績は幾多の表彰に輝やき、現在七十余才の高齢をもってなお指導の第一線にあり、新潟県体育振興員、柏崎体育団社会体育部長等の体育団体の役員として広汎な体育活動に献身的に活躍されております。

今後この偉大な指導者を継ぐ第二の坂田は求むべくもないので、坂田先生の遺鉢を継承する数多くの指導者を養成し、併せて当地方及び我が国の真体育の振興を図るため、有志各位が相より、こゝに財団法人坂田体育研究所が設立されたのであります。

昭和三十九年に東京オリムピックが決まり、新潟国体が開催されることとなりその準備があわただしく始まっている今、私はその真実な成功を悲願する坂田老の敬虔な姿を思い浮べずには居られません。

「輝しきもの」を喪失しつゝあるかの如き滔々たる時流の中で、私は坂田体育研究所設立の意義を世に訴えたいと存ずる次第であります。

四郎丸校時代の思い出

栃尾市立荷頃小学校長　柴野芳郎

昭和九年四月、私は坂田先生と一緒に長岡の四郎丸小学校に着任した。先生はお年より大変お若く見えたが、たしか四十六才くらいであられたと思う。先生はすでに柏崎市で市営の公認グラウンドの建設をはじめ、学校体育の指導に、社会体育の推進に大きな功績の数々をのこされ、柏崎に坂田氏ありとの名声は、県内外にひびきわたっておられた。その頃北越新報社主催の少年少女オリンピック大会が県下の精鋭を集め長岡で開催され、僅か八学級そこそこの小規模校でありながら四郎丸校は第一回大会以来、柏崎市の比角小学校と覇を競え輝かしい成績を収め県下各校驚異のまとであった。

私は当時二十二才の若輩で指導力など全くなかったのだが、校内で一番年が若いというので体育部員に加えられ、坂田先生を主任に陸上競技部の選手指導にあたることになった。

こんなことが、先生との深い縁となった。昼はグラウンドで真暗くなるまで走りまわり、夜は先生の御宅までおしかけ体育論を傾聴し、直接先生の熱情あふれる御指導をいただく機会に恵れた。今から考えると当時の学校体育は所謂オリンピック主義の影響で、選手制度によるスポーツ万能主義に走り勝ちであり、体育指導も技術中心の傾向がきわめて強かったように思う。私は選手指導に生命をうち込むとともに教育としての体育はこれでよいのだろうか、人間形成の教育の一環としてのスポーツの在り方はどうなければならないだろうかと大きな矛盾を感じ、其の体育とは何かを求めては、先生の御指導を仰いだものだった。

先生は「体育は祈りである」との宗教的な境地にまで到達されており、体育即生活、生活即体育であるとの理念を自らの生活を通して指導してくださった。

血の気の多かったその頃の私は、先生の主張に心から共鳴し、体育指導一途にうち込んだ生活を四郎丸校ですごしたことが、今もなつかしく感じられる。わけても先生の研究を中心に公開された体育研究会は思い出深いものがあり、その成果は全国的に紹介され、四郎丸校をして一躍体育研究校として認めさせるにいたったのも長岡における先生の功績の一つであった。

先生は体育理論においては言うまでもなかったが、理論よりむしろ実践の人であった。長岡の朝体操の振興に、体育研究クラブの育成に、自分から苦労を買ってでて実践を通して同志をつのり、共鳴者や協力者が自ら集るといったように、体育振興のための奉仕の生活が即先生の全生活でもあった。

私が教師として本日在り得るのも先生との数カ年の交りに負う処がきわめて多いことと思うとともに、いまだに先生の足もとにもとても及ばない自分をはずかしく思っている。

先生は僅か三カ年にして長岡を去られ柏崎に帰えられたが、それ以来二十数年御交誼をおねがいし、今なお先生の御指導を受けている私でもある。今回坂田体育研究所が建設される運びにいたったことをおきき致し、長年にわたる先生の悲願が達せられたことを心からお祝い申し上げるとともに、今後先生の大理想が体育都市柏崎の地に長くうけつがれ、生かされるであろうことを思う時誠に喜びにたえないものがある。

スポーツマン　フリーレター

次郎さん

（白）

（越後交通KK取締役大橋次郎氏）

第四中学　横関喜一

次郎さん、と云うと「あゝ大橋次郎さんか」と日本中のスポーツマンが云う事だろう。

水泳の大橋さん
スキーの大橋さん
ウォーキングの大橋さん

彼はスポーツで日本中（一九六一年の今日ならば日本、朝鮮、満洲）を闊歩した。

私とは柏中三年からの水泳の友、石油のうかぶ鵜川で、波と風の荒れる番神で「サームイゾ、サームイゾ」と云いながら泳いだ。そして春まだ寒い四月、剣野山の池に杭を打ち込み二十五米のプールらしきものを建設しこの池になんと明治大学の佐多、鶴田の二オリンピック選手をたたき込みば、イモリと共に泳がせたのが彼である。これから競泳らしい泳ぎ、練習らしい練習法が行われたのであるから彼の功績は偉大なものである。

後に続く選手を指導しつゝ彼自身も泳ぎまくり、新潟県選手権で高田の直江君？とせり合いながら千五百米を鯨の如く泳ぎ切り見事選手権を獲得したレースは忘れる事の出来ないレースの一つである。

物にこだわらない大ザッパの彼が旅館の夕食についた時である。「オイ待てゝ」とやおら小選手等を太い手で制しつゝおもむろに皿の中の魚をつまみ上げ、クンゝかいだ後「女中さん、この魚は取り替えてくれ、俺等は柏崎で生きた魚ばかり食べているんだ、こんなナレタ魚を食ったら明日は泳げない、卵にしてくれ」と云う程身体を大切にした人である。

その彼がベルリンオリンピックの予選会当日の朝食の失敗から五万米ウオーキングのレース途中で遂に棄権をしなければならなくなった。練習中は好タイムを出し続け、トップコンデションで予選会にのぞみ、優勝候補の第一にあげられていたのであるから、実に惜しい極みと云うべきであろう。この事以外は天下の事意の如くならざるはなし、スポーツ界の為、大橋氏の自愛を切に祈っているものである。

スポーツマン　フリーレター

林静江さん

（紅）

療養所　吉田親子

療養所の医事係を訪れると、その窓口にひときわ目立つエレガントな女性が目にとまります。

かっては（七、八年前）療養所チームのH・Cとして文字どおりチームの要として、その当時市内のバレー界に顔を出し始め市役所チームや理研チームにはどうしても勝つことが出来ず、ともすれば意気消沈しがちの我がチームの先頭に立って引っぱり続け、特に身長不足の私が松原（旧姓渡辺）さん始め強アタッカー達の高い打点から放つボールにはストップに出ても指先にもかすらない事がしばしばあり、このボールの処理に手を焼きながらも私とのコンビをくずさないようにと、私が良いアタックボールをトスできるように、あのしなやかな身体でコートせましと動きまわり、良いパスを返してくれる。そして常に私を励ましてくれた人こそ林静江さんです。

市内或いは上越大会には何時も一回戦で敗退しておりましたが、県下の国立病院療養所大会では林さんの堅実なレシーブと適切なリードによって王座につくこと四、五回関東信越大会にも毎年出場する事ができました。

林さんは近年においては、そのポジションを後輩にゆずり、テニスに転向しましたが、天性の運動神経の持主のこと、たちまち療養所のエースとなり国立病院療養所大会には欠くことのできない人となりました。

退庁後自分の練習の合い間には私達の指導にも来てくれますし、昼休み等に運動に誘うと快く応じてくれる私の最も尊敬しているスポーツウーマンの一人です。

コートの雪もようやく消え、今年も又、更に円熟味を増し、何時迄もハイティーンの若々しさを失わない林さんの華麗なボールさばきが見られ、今シーズンの活躍を期待しています。

文字のアルバム

米峰体育人会（その三）

北陸の辺地無名の若輩が発行部数僅か三百足らずのガリ版の機関紙にのせた主張に対し、現職の担当文部事務官か反対討論を買って出たのである。しかも二回に亘って、これらの事実は当時の米峰の実力を単的に示すものとして、彼等のレジスタンスが決して無駄でなかった事を物語るものであろう。

そしてその阿部は、北鯖石中学に奉職し（昭和二二年春荒浜より転勤）月橋会今井哲夫、月橋芳郎等の体育人のバックアップを得て昭和二二年十一月「農村及び農村学校の体育」（講師暉峻義等）昭和二四年三月「農村学校の体育方途」（講師　三橋喜久雄）とその所信を実践を通じて公開し、更にその年の七月、日本指導者連盟の全国研究会の会場校として、前川峰雄遠山喜一郎、山田光の三講師を迎え、北海道、鹿児島よりの県外来校者百五十名県内六百の来会者の眼前にその成果を問うたのである。

「ただ土の上に生み付けられ、土と共に生長した蛆虫同様な百姓共」は「浅薄で下卑で迷信が強く、狡猾で強欲で」で、しかも「常に圧迫と不安の中に」土に帰ってゆく、明治末葉の「土」―長塚節に見る農村生活の実態は、昭和の聖代における、しかも民主政治下の今日に於てもなお変らざる姿である。吾等の即生命と念ずる体育の道はこの冷厳なる現実の確認から出発する。

吾等の風土から不健康と困憊をどれだけ逐放し得たであろうか」（米峰六四号）

と、なげきつゝ中三女全員に「倒立」を完成し、舞踊「金と銀」を創作させ、ブラームスの「ハンガリヤ舞曲五番」を踊らせた彼の努力も所詮は蟷螂の斧であった。世は滔々として新学習指導要領に準拠すると称してスポーツ一辺倒に驀進した。

米峰八〇号（二五年九月発）は、その巻頭言に「啓蒙の時は過ぎたか」と題し卒直に時流の推移を肯定している。そして八一号から八九号にわたって「第二期啓蒙期における課題」を連載しているが、それにはこの間の苦悩に充ち満ちている。

そして米峰はやがて、そのたくましいレジスタンスの精神を失うと共に、その存在価値も漸次うすれ機関紙第九七号（二六年三月発）をもって、その多彩の活動を閉じ、バトンはようやく組織の整備なった小体連中体連に引きつがれるのである。

尚、機関紙九〇号は昭和二六年元旦発行の三色刷の記念号で、各関係者の年頭之辞が掲載されているが、それは五星霜余に亘る苦闘の歴史を飾るにふさわしい豪華な顔ぶれである。

巻頭言　本間吉隆
主張　阿部芳郎
年頭の辞　浅井浅一（名古屋大）東海林駿士（山形新庄高）大熊律夫（神戸市教委）佐々木吉蔵（文部省中等教育課）金子藤吉（山形県教委）暉峻義等（労研）三橋喜久雄（三橋体育研究所）伊沢エイ（東京女子体育短大）近藤禄郎（柏崎体育団長）野口源三郎（東京教育大）坂田四郎吉（柏崎体操倶楽部）上野徳太郎（毎日新聞社）森田徳之助（日本O・D会）小林多吉（三島・脇野町小）月橋会（柏崎市厚生課長）遠山喜一郎（千葉大）笠井恵雄（東京教育大）

かくして「米峰体育人会」も亦永劫の彼方に消えて行ったのである。

吉川町体育の開眼

吉川町体育委員　五十嵐二郎

「坂田四郎吉先生」という人を初めて見たのは、二十七年頃だったと記憶している。

その頃公民館法が立法化され、公民館活動と共に各社会教育団体も、そろそろ軌道に乗りつつあった頃で修養活動が主で、体育活動といえば派手な陸上競技が大衆の魅力を集めていた。しかしそれも決して悪くはない。

そこへ、ひょっとしたきっかけから「民踊」という言葉が流れて来た。その第一回の講習会を旭中で行いその時の講師は坂田先生その人である。

折角柏崎から来られる先生だから……と云って、四苦八苦でなんとか人数をまとめた。その頃おそらく踊りだなどと口に出そうものなら、古いカラに包まれた農村では一笑されてしまう。芸者か、オテンバか？等とのゝしられるのが普通。それに対して坂田先生が奮然として「踊ることの楽しさ、心身共に健全な発達を目指し、健康の維持増進の為にはどうしてもこれに頼る他ない。ましてや農村の労働から見て、これを適用することは、もっとも大切である」この言葉を、くり返しくり返し主張された。この言葉は私の耳からはなれようとしても離れない。

「あのおじいさん、いくつ位かね」「あの年でたいしたもんだ」池に石を投げた如く広まったことは事実だ。先生の指導も又変っていたと思う。

先ず曲を良く理解させ、その曲に親しませ、その中へ自然に溶け込ませてしまう。先ず全体のふんいきを作ることからか。

そこで立って見ていようものなら、どなりつけられ「こそこそ」と無駄話でもしようものなら又どなられる。何回か指導を受けて行くうちに「あの先生はオッカナイ」の定評を受けてしまった原因もこゝから。

しかし何年か過ぎた今になってもあの踊り方を忘れないのは何故だろう。本当に愛情ある指導の賜か。

こうして結ばれて行った坂田先生と吉川町は、今日に至っても、深くなっても浅くはならない。

時には五六人しか集まっていない会場で恥かしい思いをした時も、又吹雪をついて、大きなリュックを背負って三里の道もなんのその、と老体にムチ打って歩いた時も、何時も先生の顔は笑顔をくずさない気持に敬服させられたことも二度三度でない。

だんだん認識され、ついに昭和三十三年三月三日吉川町で珍らしく民踊振興会が誕生し、今では男性も加わり二十名の人々が和気藹々の空気を作っている。皆んな楽しそうだ。明るい家庭作りを打立てようという努力が見られる。これも先生の生んだグループ。

又昨年吉川町一本の体育祭が実現し、民踊のみならず、総合体育の発展に益々努力せねばならない。

吉川町体育の開眼は先生の出現に依るものとして筆をとめたい。

二面下段より

は遠い、どこまでも勇みはげんで、後を見るひまがない。先生の若さはこゝから来ると思うのである。

若さ―それは誰もが求めるものであり、観方によっては、体育は心身の若さ、就中肉体の若さを第一義的に求めるものであるとも言える。しかしその若さは、只スポーツをし、体操をする事からだけは生まれて来ない。体育そのものに対する熱情、否人生そのものに対する勇徳心から生れて来るものであるのを知らねばならぬ。

一生不離生命体操とは三橋喜久雄先生の言葉であるが、それは勇徳心に発し、生命的に高められた境地であり、宗教的とさえ言う事が出来よう、そしてそれは無限の生命であり、若さの源と思うのである。坂田先生の一生を貫いた尊い精神はこれであると思う。

我々は不敏にして、無為汚濁の中にあるが、せめて先生の万一を見習い努力したいと考える。

各方面から寄せられた感銘のかずかず

―体育研究所設立のために―

拝啓
酷寒の砌り益々御健勝の事と拝察致します。先生の尊い事業に敬意を表します。僅少にて甚だ恐縮ですが、資金の一部に御使用賜われば幸甚です。
遙かに御自愛を祈ります。
二月一日　東京武蔵野一住人（現金五千円の封入がありました）

◇　◇

一金壱万円也
体育研究所設立費へ
東京・日本橋馬喰町
小畑二郎様より

この方はゴム靴卸問屋を営む仙台市生れの方で、坂田先生が運動具店経営の頃、特に乞うて毎月二、三足位ずつ仕入させて戴いたのが縁となり、この送金を頂いた所以の由。

◇　◇

新聞紙上に拝見して其の後は御無沙汰失礼しています。先日の新聞に坂田体育記念館が出来るという美談、何時も若々しい御写真と共に拝見して我が事の如く嬉しく存じました。柏崎市の国宝的存在である信念の人、体育の神様、坂田大明神の犠牲奉公の御精神これ天下に誇るべき柏崎の名誉です。七十何才で尚青年の如き御風采と御元気羨ましいものです。また民踊農民演芸、農村体育の御指導にお出で下さいまし。お願いします。
先は新聞を見て感激のまま一筆敬意を表します。草々
四月二十一日
高柳町長　菅井甚一

◇　◇

一金壱万円也
諏訪町一丁目婦人会有志
一金壱万円也
比角民踊会有志
右二件は昭和三十年坂田記念体育会館建設の計画あるや毎月五円乃至十円の積立を続けられ貯蓄されたものであります。

父、四郎吉を語る

さかた・いくを

私は今時の若い人のように
無関心する人＝父or母。
などという気持は毛頭持ってはおりません。そんなものミミッチイ小市民的感情としか考えていません。父も又きっとそれを希望しているでしょう。何故ならば、もっと大人物たれと思う親心故に。
この綴り方は、父の片鱗しかふれないで随分誤解曲解している人々が多いので、少しでも真正に理解して戴き度いと思う気持で綴るものです。
今流行りのブライバシーに抵触するかも知れませんが、父も私の気持を察して決して怒らないでしょう。

＝父は偉大な修道僧です＝

七十有余歳―不孝にして視の齢を知りません―にして、末だ朝明けやらぬ中から夜深更に至る迄、たゞひたすらに体操道の修道。ひたぶるに宣教、全く寝食も家も借金も忘れ果てたもの丶如く、世の高僧聖僧たりといえども彼の修道精神には遠く及ばないと私は感じております。反面、

＝体操宗の狂信者です＝

病弱の身を救い、生命を救ってくれた体操。明けては大千体育。暮れては大千体育。口さえ開けば南無体育菩薩。よくも凝りずにと思うのですが…。
新興宗教や、一・二の宗派にあり勝ちな狂信者、そんな気さえおぼえさせられる父と体育です。
体育の道はるけくも
ひたすらに
光求めて
古稀を迎えぬ
曾って古稀を迎えた日の歌。然し、これは父の全生涯を貫いた感想として今でも生きている歌です。

＝意地ッ張り、一刻者＝

私と時折喧嘩する。詰るとすぐ「赤だっ。」ときめつけ、「理屈でない、実際だ！。」とたゝみかける。困ったものです。でも、私は赤だと言われても別に共産主義を危険思想と思っていないので腹は立ちません。それよりも「親父ツマツタナ。」と些か得意になるのが落なんです。
けれど、父が幾つかの偉業を成し遂げた原動力は、この意場ッ張り、一刻者。に一因がある筈―左顧右眄人の感情を慮ばかってばかりいたならば、何の仕事も出来ッコない筈――。

＝父、若し中央界に ありとすれば＝

私でも時々、父を勿体無いと思う事もあります。
それは父が中央界にあったならばと云う仮定にもとづく。若し父中央界にありとすれば、日本の体育界はもう少しマトモな姿になっているであろうし。父の業蹟は、もっと早くから、もっと大きく世に表われていたであろうし、もっと広く人々に知れ渡り、もっともっと尊敬を得ていたゞろうと思われます。それが柏崎みたいな日本の片隅に、と思うと……

＝父は非常な勉強家＝

二宮尊徳ばりです。小学校四年しか出ないで後独学で学んだんです。
体育人の中にあっては私も一かどの勉強家―自惚れるナ―の心算ですが、父は決して負けてはいません。私が読みもしないでツンドク本は無断で殆んど読んでおりました。いつ父をみても読書か原稿書きか、ウタタ寝―この方が多いかナ―をしております。夜は四五時間しか寝ておりません。

＝大へんな辛棒家です＝

嘘だと思ったら婦人層の指導を見学するとよい。百聞一見に如かずだ。私なら最初から怒鳴るか、突き倒すところだ。それを下手な駄洒落をいれたり、賞めたり叱ったりおだてたり、よくもまあ、あの短気者がとう感嘆する程なんです。

＝いつまでも続く先生根性＝

だから教え子に対しては いつまでも先生でいようとする。―父の最も悪い所だ。―教え子と同等になったり、教え子の下に立ったりが出来ないんです。だから、子供の頃は、きっと父を尊敬だか畏敬だかしていた人々も遂には離れ去ってしまって、はては赤の他人よりも益々持ち扱いに困る立場の人々になってしまっています。
今回だってそうです。最も協力して呉れる筈の人々なのに……。
大久保彦左衛門は、もうやめなさい。お父さん。

＝功名心の権化＝

と悪意をこめて云う人々も居る―その子供だから、奴にも気を許すナ。と私も後指さゝれた―。父に告げ口したら「アヽ、ソーダ。」と答は至極簡単。
考えてみたら、功名心のない人間に何が出来るか。と言いたい。スポーツでもそうだ。スポーツは功名心を高揚し、それを是認し、教育さえしている筈。

＝かくれた善行者＝

「そんな、人がエヘラ笑ようような事やめなさい。」と母もいう。しかし、越路の冬に雪はつきもの、雪さえ降れば雪道づけ。それが毎朝六時前の日課。日に三度も踏む事すらあった。
―ホンノ一例―

＝照レ屋の父＝

母は口説いている。未だ曾って父と母、いうなればアベックで柏崎の街を歩いた事がない。と

＝フエミニストの父＝

亦母の述懐。「あの短気者のお父さんが、私をブッタリ、たゝいたりした事は連れ添ってから四十数年、たゞの一度もない。」と。―畜生！俺はたゝかれたゾ。失礼。そうたゝかれませんでした。何といっても逃足が速かったですから―

＝気の小さな人間です＝

自分の事、自分達の家族の事となると急に小心翼々となる父です。だから人が家を建てゝやるといっても断わります。不甲斐無さに幾度か泣いた私達でした。
でも、まるっきり人が変ったようにやってくれた事が幾つかはあります。一つは私の結婚です。いわば、マア、強引にさせられたみたいです―本当か？―。
でも他人の事となると全く強引です。―これが教員一般の根性らしい―。思い当る人々が何人か読者の中におられる筈ですが……。

＝父は感激居士です＝

万年文学青年なんでしょう―血は争えないもので、三男坊たる私も感激上戸とか、文学青年とか云われております。―。最近も嬉しくて嬉しくて、夜も寝れないで嬉しくて、夜も寝れない日が度々、と申しております。
それだけに涙もろいんです。長兄が戦死したと言っては泣きわめきました。次兄が東大に合格したと言っては泣きました。生来親不孝に育てあげられ、そして怠け者の私が、全国でも最年少者組で文検にパスしたといっては泣いたそうです―その実、本人はチットモ嬉しくなかった―。しかし母は常に平然としていました。
だから人評して曰く「お母さんは航空母艦、お父さんは戦斗機。」と
今の度の皆様方の善意に対しては、それこそ端で見るも切ない位……

＝柏崎体育の父か母か＝

人は云う『父』だと。私は『母』だと思います。慥かに、曾っての柏崎体育に筋を一本いれたのは父性でしょう。しかし、
父は幾つかの事業を成し遂げました。幾つかの会をつくりました。そして、それを育みました。そして、盲目の愛―失礼―をそゝぎました。生まれた子供達は少し成長し物心がつくと抵抗し反抗し、離れ去ってゆきました。然し、心の奥深くでは尊敬もしているようです。丁度、世の母親と子供の関係に例えられます。だから、父というより『柏崎体育の母』と呼んだ方がよいと思うのです。

＝父は馬鹿です＝

だって親ゆずりの田畑を捨て、家を捨てゝしまったんですもの。親ゆずりの財宝等何一つ今は手許にないんです。たゞ身体だけなんです。しかも、ビタ一文の儲けになりはしないのみか自腹さえ切らねばならない社会体育なんぞに未だうつつをぬかしているんですから困ったものです。もっとも赤貧洗うが如きをもって高潔の士という一世紀前の根性を父は持っているんですから詮方もありませんが……

＝でも利口者です＝

何故ならば、財を捨てゝ財を得たんです。
そうです。世の中で最も尊い精神的財を得たんです。植木さん始め、今井、月橋、石黒、阪田とあげればキリのない人々の友情心と支持と尊敬とを得たんです。そして、七十有余才になっても未だ若者―といっても三十五の私を基準にして―をひしぐ曇鑠たる健康と意志力を得たんです。
今回は又、皆さんから真心のこもった研究所をつくって貰ったんですから。

＝万年青年の原因＝

誰に会っても父は若いと申します。慥かに若いです。何故若いんでしょうか。勿論、体操の効果です。そして、何時までも青年のような理想と信念を堅持しています。母の内助の功も偉大です。何時までも実践活動に従事している事もあげられます。暇さえあれば仮眠―この点今様ナポレオンですー。加えて三男坊が稀にみる親孝行だからです。父も母も「お前の事を思うと、髪が白くなる暇もゆとりもなかった。」とさえ申す程です。三男坊即ち筆者です。
筆者は四郎吉氏のオジゴンボー猫の糞です。でも戦時中モシカアニに昇格しました。今は世の総領の甚六並みに一人柏崎に残っておりますが、三っ児の魂百までもと申しまして、根性丈はいつまでも昇格しません。今でもヘソマガリです。だから父を評して『家庭人としては尊敬に価いしない。しかし体育人としてみた場合は、われ誰よりも父を尊敬する』と申しておりますし、事実、父の渡世の二の舞いだけはしたくないと肝に銘じている人間です。
兄二人は、万人が認める秀才でした。私もシューー才です。但し一字違いのシュー才です。今は県立柏崎常盤高校で女の子相手に技術の切り売りに明け暮れております。オジも名門新潟商業高校で同道を歩んでおります。県下では父についてオジの方が有名です。でも実力は私の方があると自認しています―また、自惚れか―
兎に角、親子三人、同道を究めようとしている事は世の中で又珍らしい事でしょう。今後、父同様、子供達もよろしくお願いします。
最後に坂田体育研究所の発展を祈って、駄文、冗文の筆を措きます。万才！万才！万才！

残雪の米山ある記

雪崩のあとの山肌の黒、残雪の白、その間に木々の若芽があざやかな緑を浮き立たせている。
その中を、赤に黄、ベージュにピンクと色とりどりのリュックが点々と列をなして登っていく。大方の予想を裏切って空は青さを増し春光は夏を思わせる程だが、九九三米のいたゞきは五分もしない中に肌に寒さを感じさせる。
正面北向きの壁は谷底まで雪渓が残り、みどり色のオープンシャツがたくみにグ゜ーセードして下る。胸突八丁のブナ林の苦しさも忘れて若さを謳歌している感じだ。
四月二十三日の市民米山登山は晴天に恵まれて参加者は当日になってゾク〳〵と増えた。しかも女性が圧倒的に多い。男性九名女性十三名、リーダー十名、計三十二名は手頃なパーティーである。仲々にぎやかで大平には一時間でつく。元気で楽しく、細心の注意をして自己の体力を知るよい機会であることを話し合いながら登りにつく。
時々あらわれる小さな雪渓に手をのばすと、汗ばんだ頬に快い感しょくが走る。中には早速口にほおばる人も出る。三十分すぎる。峰に出ると遠く妙高、火打の連山が高々とかすみの上に頭を出している。柿崎町と直江津市の中間に人工島が海に突き出ているのが見え、その反対側の松林には点々として沼が光っている。上下浜のキャンプ地だ。
通称ュマンスヒルといわれる前山の平は半分が雪であるが、ここからはすでに頂上は目の前。思わずさけんでみたくなる場所だ。
しかし一寸右に目を向けるとこれから行く道筋がよくわかる。その中の難所の一つが前山をすぎてすぐにとりかかるがけをまく道である。しかし今年は快適そのもの、雪崩がすっかり落ち、雪は適当にかたまり、しかも程よく盛り上って危険はない。本当に夏の高山を思わせる。ブナ林で始めてロープを張る。
柏崎山岳会のリーダーがあざやかな手さばきをみせる。一人でものびては全体計画に影響するのでユルユルのぼるのだが相変らずこの坂はつらい。雪渓のスリルを満きつして頂上についたのが十二時、リーダー会議の結果下山は谷根口に変更、一時半出発する。下るとすぐに白木の塔がある。一昨年転落死した某君の遭難碑である。あらためて皆の気持が緊張する。
さすがに谷根口はけわしい。ロープを使用すること五回、それでも足をすべらせてヒヤリとさせる場面も何回かあった。このヤセ尾根は初心者だけでは勿論無理だが、リーダーも中々苦労がいる。残雪が多いためすべって転んでも痛くはないので、その度に黄色い声がはずむ。スリルと興奮に終始してこの登山は一応成功したと思っている。そのかげに柏崎山岳会の皆さんの協力が全面的になされたことを深く感謝いたします。

募金目標三百万円 本年中に達成か

体育研究所建設費は、第一次分（体育館、事務室、便所、計二三一平方米、本年三月竣工）と、第二次分（研究室、会議室、用具室計四九・五平方米）で、あわせて概算三百万円を要するのであるが、第一次計画の体育館、事務室、便所の完成をみた今日、一日も早く活発な募金活動が展開されるよう期待されている。
すでに、昭和二十九年の坂田記念体育館建設期成同盟会よりの引継分、昭和三十三年の坂田四郎吉先生後援会の繰入分、体育研究所設立ときまってからの寄附金などをあわせると三十万円が資金として積立てられている。
なお坂田体育研究所事務局ではこの竣工式終了後、年内達成を目途に活発な募金運動を進めている。

財団法人坂田研究所寄附行為（抜萃）

第一章　総則
第一条　この法人は、財団法人坂田体育研究所という。
第二条　この法人は、事務所を新潟県柏崎市本町七丁目一七二八番地におく
第二章　目的及び事業
第三条　この法人は、地域社会の体育の研究並びに実践を行い、もって体育の振興と教育文化の発展に貢献することを目的とする。
第四条　この法人は前条の目的を達成するため次の事業を行う。
一、坂田記念体育館建設及びその維持経営
二、体育理論、技術の研究、指導、普及。
三、その他目的達成に必要な事業
第三章　役員及び職員
第五条　この法人に次の役員をおく。
理事　十名以内
監事　三名以内
第十二条　この法人の事務を処理するため、職員を置く。